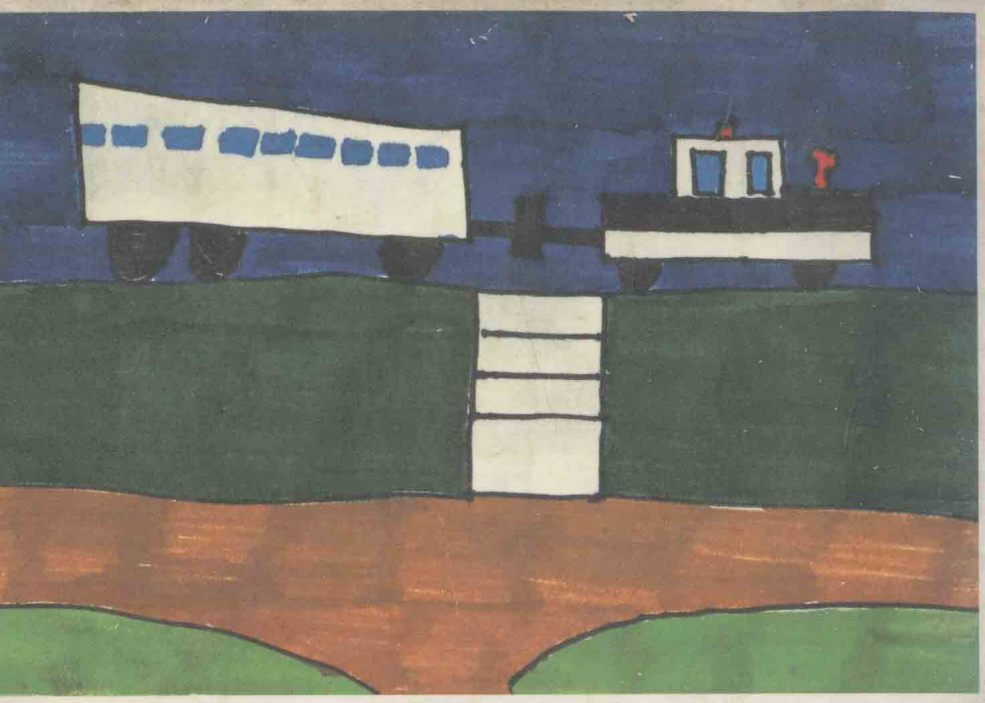


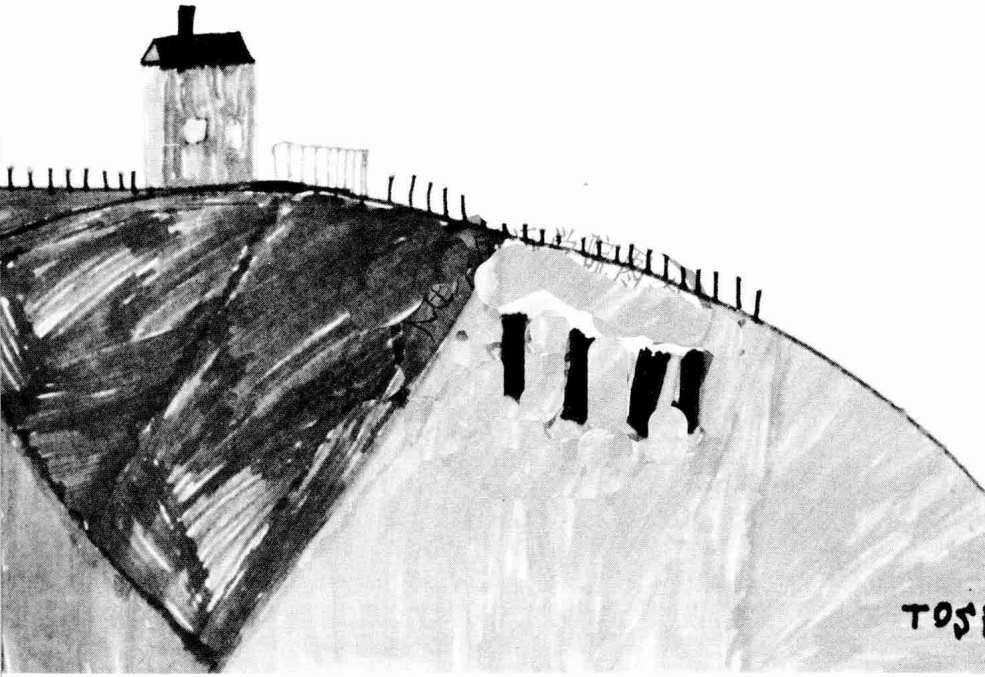
長い命のために

早瀬圭一

新潮社版

命のために

早瀬圭一



新潮社版

早瀬圭一（はやせ・けいいち）

1937年，大阪に生れる。1961年，毎日新聞社に入社。名古屋，大阪両本社・社会部，高松支局を経て東京本社・社会部。1976年より，「サンデー毎日」編集部。

長い命のために

一九八一年八月十日　印刷
一九八一年八月十五日　発行

著　者　早瀬圭一
発行者　佐藤亮一
発行所　株式会社新潮社
東京都新宿区矢来町七一
郵便番号一六二
電話（業務部）03―二六六―五一一一
（編集部）03―二六六―五四一一
振替東京四―八〇八
印刷　二光印刷株式会社
製本　神田加藤製本株式会社
定価　九五〇円

© Keiichi Hayase
1981, Printed in Japan

乱丁・落丁本は，御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

長い命のために＊目　次

移送の日　7
老人福祉指導主事の期待　23
ホームからの呼び出し　39
養育院院長室にて　54
年を取れない女　69
学問を楽しむ女　85
戸籍のない女　95
ケースワーカーの父　113

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

新聞記者ＯＢの長い一日　132
ささやかな晩餐　149
尾花沢市への出張　171
夫婦寮　192
これからの日々　206
＊
母を特別養護ホームに入れた日　225
特別養護老人ホーム全国一覧　235

装画　わたなべとしお

長い命のために

移送の日

板橋福祉事務所のケースワーカー、平岡ジャウは、その日の朝も、いつもと同じように出勤する夫と小学校六年、一年の二人の子供を送り出したあと、八時二十分に家を出た。

ジャウ。ずいぶん変わった名前だが本名である。川越で独り暮らしをしている七十一歳の父・察丈(さつじょう)が、自分の一字を取ってつけた。

「珍らしいお名前ですね」

まずたいていの人がそう言う。男か女かわからない、子供の頃は、随分冷かされもした。

三十七歳のいま、冷かされることはないが、初対面の人は必ず名前の由来を聞く。

名前のことを言われる度に父のことが頭に浮かぶ。父の独り暮らしもそろそろ限界にきている。同じ川越市内と飯能(はんのう)に住んでいる二人の弟のどちらかが引取ってくれるといいのだが……。なかなか言いだせないことだった。

姉さんこそ引取ればいい。弟たちは、いや、弟よりも弟の嫁、義妹たちは多分そう思っていることだろう——ジャウは、出てきたばかりの高層マンションを振返った。

東京都板橋区中台(なかだい)。もとは、小さな工場街だったのであろうか。いまは、中高層のマンション

が林立している。第一期、第二期と工事が進んでいて、完成すれば千八百世帯が住む予定である。

地下鉄都営三田線の志村三丁目駅まで歩いて十分足らず。乗ってしまえば、板橋区役所前まで四つ。七、八分で着く。東京で、家から職場までの通勤時間が二十分そこそこことは、夢のような話だ。よほどの幸運に恵まれなければ、得られない至近距離である。

都庁に勤める夫にとっても、ジャウほど職住隣接ではないが、首都圏の平均的サラリーマンに較べれば、はるかに便利がいい。住宅金融公庫の融資が七百万円ついて二千百五十万円。七十三平方メートル、3LDKのマンションは、東京都内だと、昭和五十四年の時点でも格安の好物件だった。何十倍という公開抽選に当ったとき、夫は大喜びだったが、ジャウは、今一つ気乗りしなかった。

公団住宅に住んで、特別切りつめたわけでもないが、二十年近く共働きしてたくわえた貯金が一千万を越えていた。川越の近辺で四、五十坪ぐらいの土地なら買えるのではないか。駄目ならゆったりした建売りでも——そこなら父を引取ることも出来る。

残業の多い夫は、都心から離れて埼玉へ行くのをいやがった。そうこうするうちに、マンションの公開抽選の広告が目についた。育ち盛りの息子二人に夫と自分、そこへ父を引取るには3LDKではいかにも手狭まだ。

雲一つなく、きょうも残暑がきびしそうである。今朝は、板橋区大山西町に住む清水ハルの〝移送〟の日だった。

法の定めによって、老人を養護老人ホーム、または特別養護老人ホームに入所させることを〝措置〟と言い、その当日、ケースワーカーか老人福祉指導主事が同行することを〝移送〟と呼ぶ。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

昭和三十六年、埼玉県立川越女子高校を卒業して都庁入りして以来、板橋福祉事務所勤務の平岡ジャウには、馴れっこになっているものの、ときに、〝措置〟〝移送〟という言葉に抵抗を感じる。

役所につくと、すでにハイヤーが来ていた。各福祉事務所にはそれぞれのやり方があるようだが、板橋では〝移送〟の際はハイヤーを使用する。

寝たきりか、それに近い人が特養（特別養護老人ホーム）に入る場合、当人に迷いはそれほどない。十分独り暮らしが出来るにもかかわらず、経済的理由などで養護老人ホームに入るような場合だと、ほとんどの人がその当日まで入所をためらう。ハイヤーで迎えに行き、いよいよ出発、という間際になってやめてしまう人も過去に何度かあった。ひょっとしたら……ジャウは、内心、覚悟して九時ちょうどに大山西町に向かった。

清水ハルは、ジャウに言われた通り、段ボール箱三つに身の回りの荷物をまとめて待っていた。

「平岡さん、お願いです。近所には、親戚のものが迎えに来て、東京駅へ行くと説明してありますので」

こざっぱりしたワンピース姿は、つい最近まで働いていたせいか、とても七十三歳には見えない。

四畳半一間に、ままごとのような台所、小さな便所がついて家賃二万三千円。鼻が突き当たるようなわずかな空間が、清水ハルにとって永年住み馴れた〝わが家〟だった。

「もう年も年なので、神戸の甥のところへ引き揚げます」

ハルは、家主と近所にはそう言って挨拶して回った。

老人ホームへ入ります、とは口が裂けても言いたくなかった。ジャウの上司、板橋福祉事務所の老人福祉指導主事、西谷良樹（にしやよしき）（四十歳）が、

「ホームに入ることは何も恥ずかしいことではないですよ。ちゃんとそう言って挨拶して行ったら？」

と言ったとき、ハルは、

「近所や家主に格別世話になったわけでもないのに、どうしてそんなことまでしなければならないのですか」

気色ばんでくってかかった。

神戸生まれの神戸育ち、東京へ出て来て夫と死別、子供もなく、二十余年を独り生きてきたハルの心は、いまも複雑に揺れている。

清水ハルが、十年近く勤めた池袋のキャバレー託児所から辞めるように言われたのが昭和五十四年七月末であった。七十三歳では転職も出来ない。

生活保護を受けるとすると、月額五万四百二十円（昭和五十六年現在六万五百円）。この中から老齢福祉年金一万六千五百円（昭和五十六年七月現在二万二千五百円）を差し引かれて実質支給額は、三万三千九百二十円（昭和五十六年現在三万八千円）。家賃二万三千円は「住宅費」として払ってくれるというものの、これで毎月やって行けるだろうか。

キャバレー託児所では、七万円もらっていた。勤務時間が午後四時から深夜の十一時四十五分。子連れで出勤するホステスの子供を勤務中預かるのである。池袋でも三流どころのキャバレーであり、幼い子供たちは、時々、顔ぶれが入れ替わるが、常時七、八人。青白く、不健康そうな子供たちの共通した特徴は、おとなの顔色を見ることだった。

ハルは、託児所に預けられた子供たちをあやしながら、この子たちは将来どうなるのだろうと

思ったが、考えてみれば、行く末が案じられるのは、なにも子供たちばかりではない。七月いっぱいで退職を言い渡されたハルも同じ身の上だった。

福祉事務所を教えてもらい、どうせお役所などあてにならぬだろうと、半信半疑で行ってみると最初に応対に出たのが、ケースワーカーの平岡ジャウだった。

ケースワーカーは小柄で、整った顔をしていたが化粧気がほとんどなく、連日、毒々しい化粧顔を見馴れているハルには、それが誠実な人のように見えた。事実、平岡ジャウはやさしかった。ジャウの上司、老人福祉指導主事、西谷良樹も、およそ役人らしからぬ男だった。この二人なら、真剣に相談に乗ってくれそうだ。ハルは、何度か足を運んだ。

西谷は、ハルに生活保護を受けて独り暮らしをするよりも、養護老人ホームに入ることをすすめた。

養護老人ホームとは家庭で養護を受けることの困難なお年寄りを収容する施設で、入所には心身又は環境上の理由に加えて経済的理由も必要とする。

生活保護を受けて独り暮らしが出来ないわけではない。しかし、ハルの場合、年が年だ。いつ病気になるかも知れないし、倒れてそのままになることもある。死後十日も二十日もたって発見される場合も最近では少なくない。

元気な間に養護ホームに入っておいた方がよいのではないか。養護ホームにいて病気で倒れ、寝たきりになったときは、特別養護ホームに移りやすい。いきなり「特養」入りは、近年、数が増えたといっても絶対数が足りない。半年も一年も待たされることもある。

老人ホーム、と一口に言っても、それこそ千差万別である。種類別に言うなら、大きく四つに分けることが出来る。

第一が、今述べたように生活に困っている人で、身寄りもなく、あっても独り暮らしが出来ない人のための「養護」、清水ハルが入ろうとしている施設である。

第二が、特別養護老人ホーム。こちらは心身に著しい欠陥があり、常時介護を必要とするか、居宅で介護を受けることが困難なものを入所させる。本人および扶養義務者の経済能力とは関係ない。

つまり寝たきりか、それに近い状態の人を入れる施設であり、生活困窮者でなくとも、高額所得者番付に登場するような金持でもかまわない。ただし、本人及び、扶養義務者の収入に応じて費用を負担する規則になっている。

第三は、軽費老人ホーム。月収十万円以下（東京都、昭和五十六年現在十五万円以下）の健康な人のためのもので月に一万一千三百五十円から上限一万四千三百五十円まで（東京都、昭和五十六年現在一万三千九百六十円、上限三万円）負担するが、かわりに個室洗面所つきを与えられ、むろん三食もつく。「軽費」には、このほか、自炊方式をとっているものもある。さきの二つ、「養護」と「特養」は、福祉事務所を通して入所するが、「軽費」の方は、直接その施設に申込み、抽選で入る。

第四が、有料の施設。温泉地の豪華なマンション方式のものもあれば、病院つきをうたい文句にしたホテル形式のモダンなのもある。昭和五十五年春、東京都西多摩郡羽村町で、ずさんな経営がもとで倒産、話題になった向陽会サンメディックもこの四番目である。

軽費ホームのように個室を与えられるといいのだが、四人とか五人が合部屋ということになると、どうしても二の足を踏む。寝たきりか、それに近い「特別養護」だとむしろ合部屋の方が便

利な面もあるけれども、健康で、まだまだ身動きできる場合、何人かが一緒というのはしんどい。人生経験も生活歴も違う人間が起居を共にして最初からうまく行くはずがない。

西谷があらましを説明したあと、ジャウが養護老人ホームの実態をこまかく説明した。ハルが入るとすれば、東京都養育院の東村山老人ホームである。

「一度見学に行かれますか」

ジャウは、ハルの顔をのぞき込むようにして聞いた。ハルは九月十日入所、と決まってから迷い始めていた。

「平岡さん、せっかくですけど生活保護の方の手続きをお願いします。いまのところでがんばれるだけがんばってみますから」

「そうしましょうか。まだまだ独りでがんばれますわねえ」

四畳半の部屋に帰って、また考えが変わるかも知れなかった。神戸の甥ごさんにも相談なさったら、と言ったのに対してハルは強く首を横に振った。いまさら親戚の世話になる気はなかった。

ホームに入ることをすすめると、ためらい、それでは生活保護の手続きをとろうとすると、ちょっと待ってほしい、もう少し考えさせてほしいと言う。養護ホームへの入所は、十人が十人最後のギリギリまで逡巡する。揺れ動く心をじっと見守って、決して無理強いせず、彼らが自ら結論を出すのを待つのも仕事のうちである。

ダンボール箱三つを車のトランクに楽々おさめ、ハルとジャウを乗せた〝移送〟のハイヤーは川越街道を北へ向かっていた。

長い長い、いやあっという間にすぎた昨日一日をハルはふり返る。午前中、部屋を掃除して荷

物をまとめ、近所と家主に挨拶した。午後になって、電話局から二人の若い職員が来た。ものの十分足らずで架線をはずし、あっけなく電話機を持ち去った。

夜、床に入るとき、いつも枕もとに電話を置くのがハルの長年の習慣だった。めったにベルは鳴らない。黒い機械は沈黙を守ってうずくまっているだけだ。淋しさには馴れていた。不安なのは、突然倒れるようなことがあったらという、それだけだった。

078……神戸の甥の家の電話番号が大きなボール紙に書いてある。実際に何かあってもたちまち駆けつけられる距離ではない。気休めだった。

夕方、ハルは、銭湯の帰り、すし屋に寄って並のちらしを一人前とビールの小びんを一本買った。変色した亡夫の写真を取り出し、二人だけのささやかな夕食をとった。

明日から、万一の場合を心配することはない。そのかわり、まったく未知の世界へ仲間入りする。七十三歳になって、新しい人生の門出であり、出発であった。

東京都養育院の施設である東京都東村山老人ホームは、東村山市青葉町にある。敷地十六万四千百七十九平方メートル。鬱蒼と繁った雑木林の中に建物が点在する。敷地の中に、養護老人ホーム（定員八百六十六人＝うち夫婦用居室七十二、百四十四人）と軽費老人ホーム（定員二百十人＝うち夫婦用居室二十、四十人）がある。

東京都東村山老人ホームと表札の掲げられた正門を、ハイヤーはゆっくりとすべるように入った。道のそこここにベンチが置かれ、入所者たちの姿がみえる。

ハルは、ハイヤーの窓に顔をすりつけるようにして外を見ている。かすかに溜息がもれた。前もって見学に来る人も多いが、ハルは来なかった。入れていただけば、そのうち馴れるでしょうから……平岡さんがすすめてくださるんだから間違いないでしょう——ハルはそうも言った。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com